

2026年3月24日

大学院数理科学研究科学学位記伝達式における
数理科学専攻長の祝辞

2025年度 数理科学専攻長 河澄響矢

皆さん、学位取得おめでとうございます。ご家族の皆様には心からお慶びを申し上げます。

学位論文の内容はそれぞれです。しかし、間違いなく、博士の学位は「免許皆伝」です。つまり、博士修了のみなさんは「数理科学免許皆伝」ということになりかと思えます。これからは完全に自立して数学・数理科学とつきあっていくこととなります。一方、修士の学位は、数理科学研究の確かな第一歩を成し遂げたことを意味します。通常、学部の数学科では卒業論文がありませんから、数理科学分野では修士論文は数学・数理科学を学ぶ道のりの一つの区切りといえるでしょう。いずれについても、ここまでの皆さんの道なりに心からの敬意を表したいと思えます。同時に、皆さんを助けてくださったあらゆる方々に専攻長としての私からも感謝を申し上げたいと思えます。

この際、皆さんに二つのことをお願いしたいと思えます。

一つ目は、知っていることと知らないこと、いまできることといまできないことを厳密に分ける習慣を保ち続けることです。数学・数理科学の勉強の基本はセミナーですが、そのセミナーでは、どこまでわかっていてどこからがわからないのか？が厳しく問われたと思えます。数学・数理科学を研究してこられた皆さんは、この境目を曖昧にすると議論が先に進まなくなることは身に沁みて体験されたと思えます。そして、この境目を明確にしながら研究を進める習慣を身につけられたと思えます。全学の会議に出席すると様々な分野の研究者と議論しますが、分野によってはこのあたりがぼんやりしている印象です。数学・数理科学の特徴かもしれません。皆さんはせっかく数学・数理科学を研究してこられたのですから、今後の進路にかかわらず、せっかく身につけたこの習慣を保っていただきたいと思えます。「あなたがたは『然り、然り』『否、否』と言いなさい。それ以上のことは悪から生じるのだ。」という言葉もあります。

二つ目は、4月のガイダンスでも申し上げたように、自分たちの研究の存在理由を明確な言葉で社会に説明できるよう考えていただきたいということです。経済的利益とか社会貢献とか〇〇賞とか副次的なものによるのではなく、自分たちの研究それ自身に内在する存在理由を説明することです。これは私自身を含めて充分にはできていません。そして今日の危機があります。4月のガイダンスでは申し上げなかったことがあります。それは学問の批判的機能です。最近、批判ということを非難とか人格否定とか受け取る人が散見されますが、それは違います。批判というのは吟味することです。その代表的なものには、限界を明らかにするというものもあるでしょう。数学では一旦、定理が証明されてしまうと、ずっとそのまま正しいので批判はあり得ないように思うかもしれません。そんなことはありません。たとえば、ある新しい定理を使うと既存の定理では難しかった例が一瞬で計算できてしまうということがあります。これは既存の定理に対する立派な批判です。このような批判を通して数学・数理科学を含めて全ての学問は進歩していくのです。皆さんのこれまでの数学・数理科学研究、とくに修士論文や博士論文を作成した経験が、批判のための立脚地を与えるはずです。その意味でも本日の学位記授与は皆さんのこれからの人生にとって意味をもつと考えます。

以上をもって専攻長の祝辞といたします。本日はおめでとうございます。